

書評

助産師と同じ目線の高さ故の圧倒的な迫力と臨場感

〔評者〕 島 義雄
葛飾赤十字産院・小児科

宮崎 雅子 写真・文

『Mother いのちが生まれる』

いわゆるフォトエッセイである。永年にわたって妊娠・出産の現場を撮り続けてきた、このジャンルでは第一人者の女性写真家が、自らライフワークの集大成と位置付けた作品集で、厳選の75葉と自身の軌跡を二部に章立てた構成となっている。第一部に集められた写真たちは、評者の仕事柄関連のある分野の医学・看護系の雑誌で既に見覚えたものも多く、いつもなら“やわらかく”その扉を飾ったり、あるいは専門的な記事の合い間のページにひっそり挟まる構図で記憶していたのだが、ここではひとまとまりとなって強い調子で主張をしているかのようだ。それが何で、それはなぜなのか、第二部まで読み進めば得心がゆく。

女史は修行時代にやがて本業とする写真のテーマを探しながら、「妊娠していたわけでもないのに参加した」地域の出産準備クラスで、助産婦(当時)という職業の存在を知る。新しいいのちの誕生を助ける仕事、女性ならではの仕事、そしてなんとも美しい「助産婦」という言葉の響きにすっかり魅了される。以来、お産の現場をフィールドと定め、プロフェッショナルの魂を持った誇り高い「助産婦さん」とのいくつもの邂逅を経る。そしていつしか、自ら昼夜を問わず雨風も厭わずお産に駆け付ける、まるで「助産婦さん」そのもののような写真家として現在に至ったようである。

出産を命懸けの闘いと言うは易いが、そう語ることができるのは本来当事者でしかないはず。それでも寄り添い遂げた助産師にもその資格があるに違いないと、彼女たちの職業をファインダー代わりに、そこから覗いた景色を撮り続けてきた女史の熱い想いが届く。評者に写真の素養はないが、圧倒的な迫力と臨場感はおそらく介添えするのと同じ目線の高さの故なのだろう。妊娠や出産の自然な姿を捉え、それがひとに与える感動を何としてでも伝えようとしながら、情緒的な賛美に流れることなく、今日の社会や医療の情勢を的確に指摘して、産む側に求められる覚悟にもきちんと触れている。その何もかもを引き受けて傍らに寄り添う助産師という職業に対する深い敬意の溢れるこの作品集は、誰よりもまず、出産の現場に立つことを仕事とする方々に手にとっていただきたいと感じた。



A4変型 頁128 2011年
定価2,730円(本体2,600円+税5%)
ISBN978-4-260-01444-1 医学書院刊